

教職志望学生の自明性を問い直すための授業実践（１）  
～「個性」に関する言説の検討～

織 田 泰 幸

三重大学共通教育センター  
大学教育研究－三重大学授業研究交流誌－  
第 22 号 別 冊  
2 0 1 4 年 発 行

## 教職志望学生の自明性を問い直すための授業実践 (1)

### ～「個性」に関する言説の検討～

織田 泰幸

#### I. 問題意識

「生きる力」「学びあい」「個性」「国を愛する心」「開かれた学校」「新しい公共」「グローバリゼーション」…現在の教育界には、曖昧だが美しい響きを持った様々な言葉(キーワード)があふれている。これらの言葉は、曖昧であるがゆえに、言葉の語られ方、理解や解釈のされ方に多様性がある。また、それらの言葉は自明で常識的なものとして使用され、言葉そのものの意味について、深く考えたり捉えなおしたりする機会はありません。

しかし、こうした現状に無関心であることは、教師を目指す学生たちにとって好ましいことではないと考える。なぜなら、教育の常識は、個人的体験に基づく部分的見解であり、他の問題に必ずしも妥当せず、矛盾した見解に逢着する可能性があるからである(小笠原 1996, 28 頁)。また、教育は単純素朴な思い入れや思い込みで、誰もがいくらかでも語ることでできるトピックであるゆえ、誰でも何かしらの「理想の教育」を思い描けば、現実の教育をいくらかでも批判できるが、その「理想の教育」の単純さゆえに生じる可能性のある「困った帰結」については考慮が払われないからである(広田 2003, 4 頁)。したがって、教師を目指す学生にとっては、ステレオタイプの「常識的な」見方を「あたりまえ」のこととして受け入れ、そこで何となく納得して思考停止するのではなく、常識を疑い、物事を多層的・多面的に見て、深く考えるような学びの姿勢・態度を身につけることが重要なのではないだろうか。

以上のような問題意識から、筆者が担当する教職関連の授業では、授業を通じて受講生の思考の前提や常識、すなわち「自明性」を問い直すことを主たるねらいとして、毎回の授業を構成している。

本稿では、その中でも、筆者が担当する全学教職の『教育原理』における「個性」をテーマとする授業(第11回目)について紹介する<sup>2</sup>。この回の授業では、「個性」についての専門的・学問的な研究成果や議論を紹介するというよりは、「個性」言説<sup>3</sup>に関する様々な論者によるものの見方や考え方の紹介を通じて、受講生自身の「個性」観をあらためて問い直すことを目的とする<sup>4</sup>。

#### II. 教育における「個性」言説

##### (1) 「個性」の辞書的定義

最初に個性の辞書的な定義を紹介する。広辞苑では「個

人に具わり、他の人とはちがう、その個人にしかない性格・性質。」とある。また、教育用語辞典では、「個体(個人)を他から区別する性質の全体をさし、性格、性質、知能、容姿等、すべてに対して包括的に用いられる。いわゆる『その人らしさ』のように、様々な側面での個人の際のおおもとに位置し、際立って他と異なる部分を指す」<sup>5</sup>と明記されている。

##### (2) 教育政策における「個性」の語られ方

次いで、「個性」という言葉が教育政策の文書に登場する言葉であることを確認する。教育政策として現在の「個性尊重」に直接つながる思想を始めて明確に表明したのは、中央教育審議会の1971年答申であった。「初等・中等教育は、人間の一生を通じての成長と発達の基礎づくりとして、国民の教育として不可欠なものを共通に修得させるとともに、豊かな個性を伸ばすことを重視しなければならない」。その後、より明確に「個性重視」の原則が明記されたのは1987年の臨時教育審議会最終答申であった。「今次教育改革において最も重要なことは、これまでの我が国の根深い病弊である画一性、硬直性、閉鎖性を打破して、個人の尊厳、個性の尊重、自由・自律、自己責任の原則、すなわち『個性重視の原則』を確立することである」<sup>6</sup>。

ここでは、答申における「個性重視の原則」が、画一性・硬直性・閉鎖性という従来の学校教育に対する批判として打ち出されていることを確認する。

##### (3) 受講生の考える「個人的な人物」

以上のような基本的事項をごく簡単に押さえたうえで、班ごとに次の小問題を考えてもらおう(3分程度)。「あなたが考える『個人的な人』とは誰ですか? その人物の名前を教えてください」。この問題に対して、受講生から挙げられるのは、例えば以下のような人物である。

レディ・ガガ、きゃりーぱみゅぱみゅ、マツコデラックス、北野武(ビートたけし)、ダウタウン、明石家さんま、タモリ、太田光、イチロー、本田圭佑、エジソン、ピカソ、アインシュタイン、太宰治、宮藤官九郎、手塚治虫、マイケル・ジャクソン…

受講生からは、芸能人、アーティスト、お笑い芸人、スポーツ選手、作家、漫画家、歴史上の偉人など馴染のある

様々な人物の名前が挙げられる。いずれの人物も「個性的」であるが、その「個性」とは何であるかを説明するのは困難であり、「個性的」であることの内実は、実際には極めて多様性があることを、ひとまず把握する。

#### (4)「個性」と関連する言葉

続いて、「個性」と関連性のある言葉として、①アイデンティティ、②自分探し、③オンリーワンを取り上げて、それぞれについて簡単に紹介する<sup>7</sup>。

##### ①アイデンティティ

アイデンティティ<sup>8</sup>とは、「自分は何ものであるか」という一貫性、「自分は他でもなく自分である」という統合された感覚のことである（現代位相研究所 2010, 30 頁）。「アイデンティティがある」とは「自分が他者とは異なることの自覚」と「子どものころからの連続した一貫性のある自分の感覚があること」を意味する（西園 1993, 13 頁）<sup>9</sup>。

教育学者の齋藤孝は次のように述べている。「アイデンティティは自己同一性と訳されることもあるが、存在証明（＝自分の存在を証明する何か）のほうに適している。アイデンティティは生まれつき持っているものではない。他者と出会い新しい世界に入っていくことで自分の世界と他者の世界がすりあわせられ、自らの存在証明が手応えのあるものになっていく。個性や自由といった曖昧な概念に比べて、アイデンティティは教育の中心概念となりうる。（齋藤 2001, 133～137 頁。）

##### ②自分探し

「自分探し」とは、「それまでの自分の生き方、居場所を脱出して新しい自分の生き方、居場所を求めること」（大辞泉）である。第 16 期中央教育審議会答申（1997）では、「教育は、子供たちの『自分さがしの旅』を扶ける営みとも言える」と明記された。また、元サッカー日本代表の中田英寿は、2006 年のワールドカップで日本が敗退した直後に、自身のホームページに「今言えることは、プロサッカーという旅から卒業し“新たな自分”探しの旅に出たい」という言葉を書き記して引退を宣言した（浅野編 2010, 23 頁）。このように「自分探し」は、ある程度一般的な用語となっていることが伺えるが、この言葉の孕む危険性についての指摘も見られる。

思想家の内田樹（2007b）は、「自分はほんとうは何者なのか？」「自分はほんとうは何をしたいのか？」という問いの答えを求めて、自分のことを知らない人間のいるところへ行こうと考える発想法を「自分探しイデオロギー」と呼んで批判する。そして、自分の自分に対する評価が、他者が自分に下す評価よりも真実であるという前提には根拠がなく、先の問いについて知りたいならば、むしろ自分のことをよく知っている人たちに聞き取りを行うほうがずっと有益な情報が手に入るのではないかと指摘している。

他にも「自分探し」と関わって、以下のような新聞記事

を紹介する。

「大学で心理学を専攻した若者がいた。カウンセラーを目指して卒業後も勉強を続けたが、実際には部屋に引きこもり、夢を膨らませているだけだった。「自分は特別」という思いがあった。そんな生活が何年も続き、同事務局を訪ねて、代表の二神能基（62）にがつんと言われた。「あきらめろ。お前なんかは何もないよ。お互い平凡な人間だということ認めろ。」そのときは反発したが、他の引きこもりの若者たちと寮で共同生活を続け、様々な仕事体験を重ねるうちに、「平凡なことの積み重ねこそ大事」そう思えるようになったという…（中略）…「自分探し疲れ」という言葉がある。「個性的でなければ生きていく意味がない」という思い込みが、若者を追い詰めているという指摘だ。自分探しはもちろん必要だ。だが、それは挫折も含む様々な体験の上に成り立つのではないかと。私たち大人はその体験もさせないまま、ただ「好きな道を行きなさい」と言ってきたのではないかと。（読売新聞 2006 年 4 月 15 日付）

##### ③オンリーワン

SMAP の『世界に一つだけの花』（2003 年）という曲には、「一人ひとり違う種を持つ…一つとして同じものはないから…もともと特別な Only One」という歌詞がある。この曲の歌詞には「全ての人が生まれながらに自分らしさを持っているのだから、その自分らしさを大切にしよう」、「No.1 を目指して争うのはよそう、みんな特別な Only One なのだから。」というメッセージが込められている（岩田 2006, 151 頁）という指摘がある。この曲の大ヒットとともに、我が国では「オンリーワン」という言葉が広まったが、この言葉をめぐっては様々な論者からの指摘がある。

例えば、社会学者の土井隆義（2004）は、近年の「オンリーワン」を志向する社会的な風潮や規範によって、現代の子どもたちは「個性的な自分」の発見へと際限なく煽りたてられる強迫観念に取りつかれていると主張する。また精神科医の香山リカ（2004）は、自分の所属する大学の学生とのエピソードから、「オンリーワン幻想」と呼ぶ以下のような事例を紹介している。

「ある学生は、第一志望ではなかったものの、名の通った企業の内定を獲得することができた。その時はそれなりにうれしそうだったが、いざ就職する段になって自分から辞退してしまった。『どうして、もったいない』と思わず口にする、学生は言った。『だってこの仕事、別に私じゃなくてもだれでもできると思って』。その言い分はもっともだが、私は頭を抱えなくなった。『私でなければできない仕事』に就いている人など、いったい世の中にどれほどいるだろう…本当の意味で『その人じゃなければできない仕事』をしているのは、一部のアーティストやスポーツのスーパースター、あとは一代名人のような職人くらいではないだろうか。（185～186 頁）

以上のような「個性」と関連する言葉の説明と関わっては、三田紀房『ドラゴン桜』、井上雄彦『スラムダンク』、羽海野チカ『ハチミツとクロバナー』といった漫画の一部を活用することで、受講生にとってよりイメージのしやすい説明を心がける。

### Ⅲ. 生徒の「個性」と関わる演習問題

続いて、演習用紙を配付し、各班で次の場面について考えてもらう(10分程度)。

問題：あなたの赴任している学校では、生徒に対して制服の着用が決めています。ある日、あなたは生徒から「なぜ制服を着なければいけないんですか？制服は生徒の個性を失わせると思います。」と言われました。あなたは教師という立場上、この生徒を説得しなければなりません。この生徒をどのような言葉で説得しますか？(説得の手順や方法を説明するのではなく、具体的な言葉で書いてください<sup>10)</sup>)

この演習問題に対して、各班からは、例えば以下のような回答が提出される。

- \* 「校則で決まっているからだよ。社会に出たらルールや決まりを守らないといけないよ。」
- \* 「学校は集団生活をすることだから、規則には従うべきだよ。それに制服を着られるのは今のうちだけだよ。」
- \* 「個性は見た目のことじゃないと思うよ。」
- \* 「制服以外のところで個性を発揮していけばいいんじゃないかな。」
- \* 「制服は同じでも、内面を輝かせて人との違いを出せばいいんじゃないかな。」
- \* 「個性は服装以外にも、言葉や行動で表現することができると思うよ。それに制服は自分がその学校の生徒であることを示す大切なものであって、その学校の生徒であるということも一つの個性なんじゃないかな。だから校則を守ったうえで、個性を出せる工夫をしていこうね。」
- \* 「個性とはルールや規則の中で発揮するもので、ルールを破って発揮するものではない。制服を着るというルールがある以上、それ以外のところで個性を出すべきだ、と先生は思うよ。」

このように簡潔なものからかなり踏み込んだものまで、様々な回答が提出される。これらの回答に対する授業者からのコメントは最小限に留めて、次のDVD鑑賞へと移る。

### Ⅳ. DVD鑑賞を通じた「個性」理解

ここで鑑賞するのは、テレビ東京系『たけしのニッポンのミカタ』における、①「個性なんていらない!？」(2010年3月5日放送分)<sup>11)</sup>および②「自由が日本をダメにする!？」(2012年3月23日放送分)である。以下では、それらの鑑賞部分の概要を紹介する。

る!？」(2012年3月23日放送分)である。以下では、それらの鑑賞部分の概要を紹介する。

①「個性なんていらない!？」～規制があるほど個性は生まれる?

落語家の林家正蔵(9代目)によれば、古典落語の世界では、昔から噺の筋はほとんど変わらず、落語好きのお客は起承転結・オチ、さらには「くすぐり」というギャグまで知っている。しかし、落語家はそうした縛りがあるからこそ個性を出していいという。例えば、三遊亭圓朝作『死神』という噺(死神が病人の枕元にいれば死んでしまい、足もとにいれば助かるという話)の中の、枕元にいる死神に驚いた医者が布団をひっくり返すことを思いつく場面において、林家正蔵はあわてた医者が持っていた煙草(キセル)を逆に吸ってしまったことから、布団をひっくり返すことを思いついたという一節を加えることで個性を出した。他にも古今亭志生『火炎太鼓』や桂文楽『明烏』といったように、同じ噺の一部にその人なりのアレンジを加えることで、自分の個性の生きた落語になるという。

東京デザイン専門学校の生徒たちの協力によって行われた実験が紹介される。生徒を6人ずつ2つのグループに分けて、「怖いリンゴを描いて下さい」というテーマを与えられたグループと、「リンゴそのものには手を加えずに怖いリンゴを描いて下さい」という規制(条件)を加えたテーマを与えられたグループで、それぞれ絵を描いてもらった。その結果、前者のグループは、リンゴに怖い顔や表情をつけたりして、リンゴが人間を襲って食べるような絵が多かった。表現方法は3種類で、6人中4人が同じ表現方法であった。これに対して、後者のチームは、飛行機の翼に乗ったリンゴ、体内に入り込んだ血だらけのリンゴ、ひび割れた氷の上に置かれた危ういリンゴ、ガラスのリンゴから溢れ出る妖気など、全員が異なる表現方法であった。専門学校講師によれば、前者はあまり深く考えずに書いたため表現に差が少ないのに対して、後者は「怖さとは何か」について規制を越えてより深く考えた結果、全員異なる表現の絵が生まれたのだという。

航空会社ANAのグランドスタッフ(キャビンアテンダント)には、「身だしなみ着用スタンダード」という決まりに基づいて、制服だけでなく、髪をまとめるものの色(黒のみ)、靴の色(黒のみ)とヒールの高さ(3~5cm)、ストッキングの厚さ、スカート丈、空けていいシャツのボタンの数(1個のみ)に至るまで、身だしなみに厳格な規制がある。その中で唯一「スカーフ」の結び方については自由が認められている。その結果、独自に趣向を凝らして考案されたスカーフの結び方が50種類以上も生まれたのだという。

②「自由が日本をダメにする!？」～最近の高校生は自由よりも制約を好む?～

東京都江戸川区にある都立小岩高校は、1962年の創立当初は制服の着用が義務だったが、その5年後、生徒たちが制服の廃止を要求し、それ以降は私服での登校が認められてきた。ところが、2011年度入学生から制服の着用が義務づけられると、興味深い現象が起こった。まず、制服復活の翌年には、推薦入試の応募倍率が3.0前後から4.90へと上昇し、一般入試の応募倍率が1.3前後から1.58へと上昇した。そして、本来は服装が自由なはずの2年生と3年生のおよそ8～9割が自発的に制服を着用するようになったのである。1年生たちからは「制服のほうがかっこいい」「みんなと同じだと安心感がある」という意見が聞かれ、2～3年生からは「私服だと周囲から浮く」「注目を浴びるのは嫌」という意見が聞かれた。

以上のテレビ番組を鑑賞した後に、班員どうしで自由に感想や意見を出し合うフリーセッションの時間(3～4分程度)を設ける。授業者からは、以下のような趣旨のコメントをする。①と関わって、「規制によって個性が失われる」、あるいは逆に「規制によって個性が失われるわけではない」と漠然と考える人は多かったと思うが、「規制があるからこそ個性が輝く」という発想を明確に持っていた人はあまりいなかったのではないかと。②と関わって、かつての時代の高校生にとっては制服が抑圧や統制のシンボルだったかもしれないが、現代の高校生にとっては、むしろ一体感や安心感を得るものかもしれない。

## V. 「個性」に関する様々な見解

フリーセッション後には、以下のような「個性」に関する様々な見解を紹介する。

\*「人間の個性は、他の人間の個性とふれあうことにより生じ、発達する…個性が個性と自覚されるのは、例えば、他者の個性と出会ったときであり、もっと根源的にいえば、他者の求めに応じて援助ができて感謝されたと意識されるときである。その意味で、個性を他者の個性と切り離して規定すること自体、幻想といわざるを得ない。」(萩原 1997, 13 頁。)

\*「個性的である」とは、豊かで強靱な独自の内面性を持つことである。したがって、それは以下のようなものではない。\*他の人と違うことをしたり言ったりすること、\*カッコよくて、オシャレで、多くの人の注目を浴びて、目立つこと、\*「これが私の個性だから」「自分はこれでいい」と安易な水準で現状に開き直すこと、\*得手勝手や独善を「個性」という言葉でくるんで恥ずかしげもなく押し出すこと。(梶田 1987, 9 頁および 185 頁。)

\*教育批判や教育改革の議論では、制服や管理教育は、日本の教育を画一的で個性抑圧的なものにしてしている元凶の

ようにいわれてきた。例えば、公立中学の制服や頭髪規制は個性抑圧の象徴として批判されてきた。しかし、私立の中学や高校で制服を採用している学校で、個性を抑圧するという批判は一般には聞かれない。それどころか、学校に対する愛着や誇りの源泉として、あるいは集合統治のシンボルとして、むしろポジティブに評価される場合が少なくない。(藤田 1997, 46～47 頁。)

\*「個性とは個性を頭ごなしに圧殺する環境にあつて、それにもかかわらず、どうしても際立ってしまうというかたちで発現するものなのである。個性がつぶされる環境で簡単につぶされるような個性は教員のものであろうと、学生のものであろうと、もともと個性と呼ぶに値しないのである。」(内田 2007a, 47 頁。)

以上のような見解を紹介した後、授業者から以下のような趣旨のコメントをする。「規制が個性を抑圧する」という前提に立てば、「制服や校則という外的な規制は生徒の個性を抑圧する」、「制服や校則の自由化を認めることは生徒の個性の発揮や伸長につながる」という主張になる。臨時教育審議会の「個性重視の原則」と関わって議論された「基礎・基本を徹底する伝統的な教育観・学校観が生徒の個性の教育を阻害する」、「生徒の個性を伸長するためには、一斉授業ではなく体験学習や問題解決学習が重要である」といった指摘は、同様の前提に立っていたように思われる。これに対して、「規制の中で個性が輝く」という前提に立てば、「制服や校則という外的な規制の中でも生徒の個性が輝く」、「伝統的な教育観・学校観が生徒の個性を阻害してきたわけではない」、「個性の伸長と授業の指導形態は直接関係ない」といった指摘も生まれる<sup>12</sup>。みなさんは教師として、どちらの前提に立つのか、あるいは両方の前提が正しいのか、そしてどのように生徒の「個性」と向き合うのか、といったことを考えてほしい。

## VI. 本時の授業のまとめ

最後に、本時の授業のまとめとして、以下の諸点を確認する。

- 子どもの個性は、近年の教育界において非常に大切にされている。
- ある人の個性は、他者の個性との関係性の中で際立ってくるものである。
- 規制によって個性が潰される可能性はあるが、個性は規制をかけるからこそ生まれる側面もある。規制によって圧殺されるものは、もともと個性と呼ぶに値しないのではないかと。

「個性」に関してさらに理解や洞察を深めたい人のために、いくつかの書籍を紹介し<sup>13</sup>、受講生に授業の感想用紙を配付して授業を終える。

## VII. 学生の感想

以上が授業の概要であるが、「受講生自身の『個性』観をあらためて問い直す」という目的は達成されたのだろうか。この点を確認するために、学生の感想の一部を抜粋する。

- \* 今まで「個性が大切」と漠然と思っていたが、個性について深く考えることはなかったのでよい機会になった。個性という言葉の本質を考えたように思う。
- \* 規制があるから個性が生きるという発想は自分にはなかった。本当にすごいと思った。
- \* 自由の中でこそその個性は伸ばせると思っていた自分の考えを改めることになった。
- \* 個性は自分が持つものだと思っていたが、周りの人がいるからつくられるものだと感じた。
- \* 個性とはそれが圧殺される環境の中で生まれるという言葉に感銘を受けた。自分もそういう個性を見つけたい。
- \* 制服では個性が出せず、私服なら個性が出せるという発想は、表面だけの薄っぺらいものだと感じた。自分が教師になったら生徒たちにも伝えたい。

以上のような感想から、授業者としては、受講生たちが「個性」に関して漠然と抱いていた思考の前提に揺さぶりをかけ、教師になった時の生徒の「個性」に対する向き合い方を考えるきっかけをあたえることができたものと考えている。

## 注

- 1 このような問題意識は、教育社会学者の荻谷剛彦(1996)の「知的複眼思考法」(ありきたりの常識や紋切り型の考え方にとらわれずに、ものごとを考えていく方法)をはじめとして、教育哲学者の小笠原(1996)や教育社会学者の広田(2003, 2011)の指摘や発想を念頭に置いている。
- 2 この回の授業の基本となる発想は、田中(1997)、岩田(2006)、浅野編(2010:第1章)の論考に多くを負っている。
- 3 教育言説とは、「教育に関する一定のまとまりをもった論述で、聖生が付与されて人々を幻惑させる力を持ち、教育に関する認識や価値判断の基本枠組みとなり、実践の動機づけや指針として機能するもの」である(今津1997, 12頁)。「個性」をめぐる言説の典型は、「学校は子どもの個性を尊重するところである」(同, 15頁)というものである。
- 4 この授業の受講生の多くは、人文学部と生物資源学部の学生であり、中学校か高等学校の教員志望である。受講生は2年生が最も多く、この授業が最初に受講する教職関連の授業である場合が多いため、初学者向けの平易な

内容にするよう心掛けている。授業の方法としては、講義を基本として、部分的に班別演習の機会を設ける。班分けは、授業者が、学部・学年・性別をなるべくバラバラにする形で4人1組の班を事前に設定する。資料の多くはパワーポイントで作成し、授業中の板書や印刷物の配布は最低限に留め、授業後にMoodleにアップしている。

- 5 岩内亮一ほか編著『教育学用語辞典(第四版)』学文社、[2006年, 97頁]。
- 6 他にも、2003年3月の中央教育審議会答申では、「すべての人はそれぞれ多様な個性や特性を持つ。教育は、それを尊重し、生かし、育てることによって、多様な成長過程と人生を保障するものでなければならない」と明記されている。
- 7 これら3つの言葉以外にも、「キャラが立つ」(=ゲーム・アニメのキャラクターや人物について、はっきりとした個性が確立されていて、他よりも目立って見えること。個性が光ること)、「空気を読む」(=その場の雰囲気から状況を推察すること。特に、その場で自分が何をすべきか、すべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを憶測して判断すること)という言葉についても補足的に言及する。土井(2004)によれば、キャラが立つという表現は、テレビ番組の制作者たちが近年よく使う業界用語に由来している。最近の若者は個性的であることを「キャラが立つ」と表現し、自分もまた「キャラの立つ」個性的な人物でありたいと切に願っている(24頁)。また、社会学者の山田(2009)は、「空気を読む」と「場をわかまえる」という態度・コミュニケーションの違いを明確に区別している(116~118頁)。
- 8 心理学者の鎌によれば、アイデンティティとは、『自分』ということについての意識やその内容(鎌1990, 9頁)を指し、「自分とは何者か」というテーマの探求と関わっている。
- 9 他にも次のような見解を補足的に紹介する。アイデンティティは、「例えば心臓が左胸にあるのと同じように『ある』のではない。それは、人が自分と周囲の世界、周囲の他人たちとの関わりを通して得た自分自身についての意味や解釈を通して『ある』」(浅野2013, 13頁)。アイデンティティは、「必ずしも社会的価値(学校的価値)に合致した内容を持つものではなく、自分の置かれた境遇との格闘の結果、生まれてくる自己信頼である」(田中2003, 43頁)。
- 10 手順や方法ではなく具体的な言葉で考えてもらう理由は、受講生に他人事ではなく、自分事としてこの問題に取り組んでももらうためである。
- 11 ①の番組では、他にも、軽自動車の事例(サイズや排気量に厳格な規制があるからこそ、その中でいかに快適な

空間を創るかを競い、多様な世界に類を見ない優れたコンパクトカーが誕生したこと)や、住宅の事例(細分化された狭い土地と厳しい建築基準法のもとで、それぞれの環境下で最大限快適に暮らせる家を目指した結果、個性的な概観や機能を持つ住宅が生まれ、世界から注目されていること)が紹介される。

- 12 これらの見解は、雑誌『現代教育科学』明治図書(1997年11月号)の特集『個性重視』の教育言説を疑うに寄稿された大学教授や現場教員の複数の論文を参照した。
- 13 入門書として土井(2004)を、専門書として森田ら(1996)、萩原(1997)を紹介する。

代学校教育大辞典①』ぎょうせい、1993年、13～14頁。  
 萩原元昭編著『個性の社会学』学文社、1997年。  
 広田照幸『教育には何ができないか—教育神話の解体と再生の試み』春秋社、2003年。  
 広田照幸『教育論議の作法—教育の日常を懐疑的に読み解く』時事通信社、2011年。  
 藤田英典『教育改革—共生時代の学校づくり』岩波新書、1997年。  
 森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学編著『教育学年報4 個性という幻想』世織書房、1995年。  
 山田真茂留『普通という希望』青弓社、2009年。

## 引用・参考文献

- 浅野智彦『若者とは誰か—アイデンティティの30年』河出ブックス、2013年。
- 浅野智彦編著『考える力が身につく 社会学入門』中経出版、2010年。
- 今津孝次郎『教育言説』とは』今津孝次郎・樋田大二郎編著『教育言説をどう読むか—教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社、1997年、1～17頁。
- 岩田考「若者のアイデンティティはどう変わったか」浅野智彦編著『検証・若者の変貌』勁草書房、2006年、151～186頁。
- 内田樹『狼少年のパラドクス—ウチダ式教育再生論』朝日新聞社、2007a年。
- 内田樹『下流志向—学ばない子どもたち 働かない若者たち』講談社、2007b年。
- 小笠原道雄「教育哲学—常識を疑ってみよう」『教育学がわかる』朝日出版社、1996年、28～29頁。
- 梶田叡一『真の個性教育とは』国土社、1987年。
- 香山リカ『就職がこわい』講談社、2004年。
- 現代位相研究会編『本当にわかる 社会学』日本実業出版社、2010年。
- 荻谷剛彦『知的複眼思考法』講談社、1996年。
- 齋藤孝『子どもに伝えたい〈三つの力〉』NHK ブックス、2001年。
- 鐘幹八郎『アイデンティティの心理学』講談社現代新書、1990年。
- 田中智志『教育学がわかる事典』日本実業出版社、2003年。
- 田中節雄『学校は子どもの個性を尊重するところである—学歴主義社会のなかでもつ意味』今津孝次郎・樋田大二郎編著『教育言説をどう読むか—教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社、1997年、21～44頁。
- 土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える』岩波ブックレット、2004年。
- 西園薫「アイデンティティ」奥田真丈・河野重男監修『現